

畫典通考

七

洋学文庫
文庫 8
D 255
7



文庫
D 255
7

畫典通考卷之七目錄

鄒康節

禎門

張籍

海市

張金鎗

信以孝子

宋杜孝

伊水より長あみ出づ圖

庵室の孫の御身

賈島の逢時の心圖

東坡の待意の圖

津高祖のしくしを乞圖

幼児継母の難と救圖

竹筒の中を文故卿のめりて

會文書 炎後三編 卷二



39-7970

010190614110

宋 魏氏

天名賜を辨し身徳を

自然居士

魏蘇を打く経法に導

秋 胡

胸を兄忘き顔を如る

王 烈

虎 福

深竹后賣

仁田 妻

陶朱公

明太祖

安ふふ 志雲

平貞時

畫典通考卷之七

邵康節



邵子字子雍其先名也其先名也其先名也

人其先名也其先名也其先名也其先名也

其先名也其先名也其先名也其先名也

其先名也其先名也其先名也其先名也

其先名也其先名也其先名也其先名也

其先名也其先名也其先名也其先名也

其先名也其先名也其先名也其先名也

其先名也其先名也其先名也其先名也

其先名也其先名也其先名也其先名也



観河

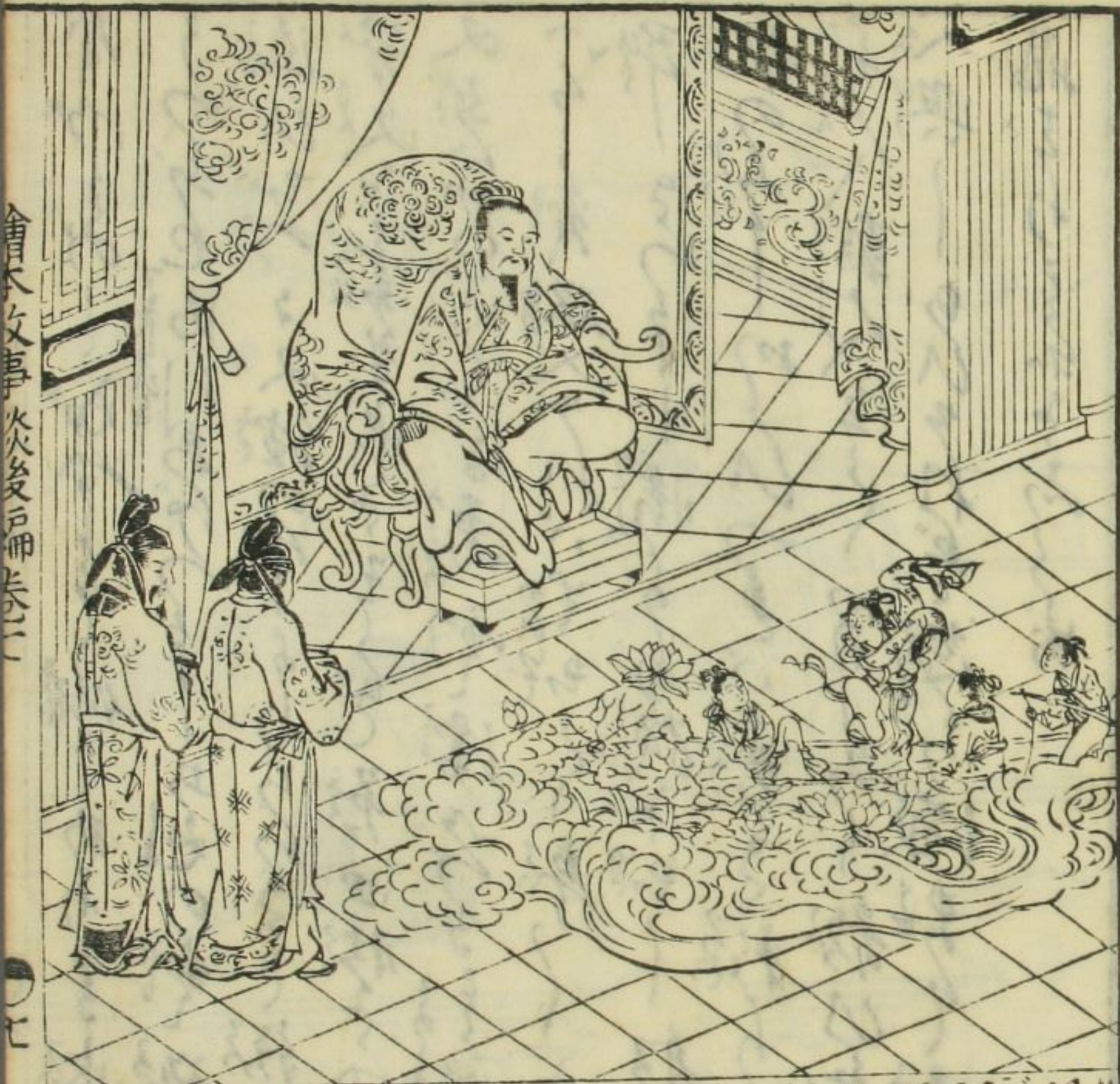
此河法師其居る所ののやを 願ひ比賣に
 此の所の河井を運ぶ所と云ふに 和歌を
 和歌の四巻と云ふ所をある世人 和歌の
 和歌の六巻の所の歌を運ぶに 和歌の
 和歌の七巻の所の歌を運ぶに 和歌の
 和歌の八巻の所の歌を運ぶに 和歌の
 和歌の九巻の所の歌を運ぶに 和歌の
 和歌の十巻の所の歌を運ぶに 和歌の
 和歌の十一巻の所の歌を運ぶに 和歌の
 和歌の十二巻の所の歌を運ぶに 和歌の
 和歌の十三巻の所の歌を運ぶに 和歌の
 和歌の十四巻の所の歌を運ぶに 和歌の
 和歌の十五巻の所の歌を運ぶに 和歌の
 和歌の十六巻の所の歌を運ぶに 和歌の
 和歌の十七巻の所の歌を運ぶに 和歌の
 和歌の十八巻の所の歌を運ぶに 和歌の
 和歌の十九巻の所の歌を運ぶに 和歌の
 和歌の二十巻の所の歌を運ぶに 和歌の



明中蕩搖浮世生萬象 豈有貝闕藏珠宮 心
之亦見皆幻影 散以耳目煩 碎土歲寒水冷
天地閉 為我起 蟄鞭 烹龍 重樓翠阜出霜曉
異事驚倒百歲翁



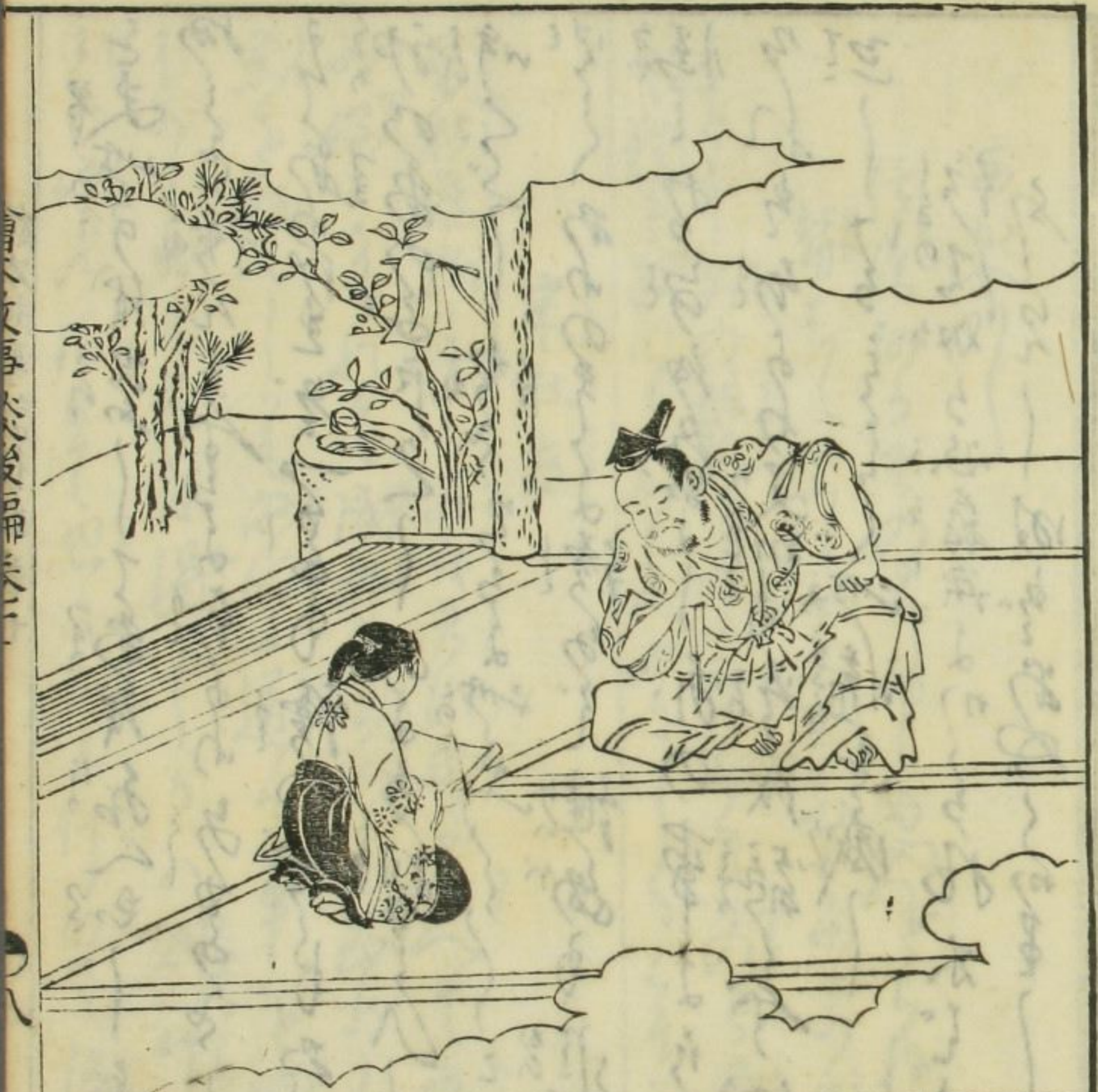
張金箱
山西の平陽
と云ふ所の
張金箱と云
通至あり
焦の多経



俗人の心を
作すもの
なり及これ
ありきき
まへめし
いふ心
いふ心
と尋し
と尋し
運を来り
駭ふ事

繪本故事 後編 巻七

我はまゝのしほをすそく假しありする水瓶を眺む
 うづらも別におかづるしやまの電瓶の中より
 透ひさぐら又瓶の中よりあららるるを鏡鏡をわし
 穿文を筆す水もそそぎ第四巻より十人のまを
 又あめのもくも高雲を濡らざるその雨の害を
 いそぐ我探入るればやんぞく歌ととくしき深く
 形なきつらき懐のめ残をわし船を折せ
 瓶の中よりやんづつまばやんぎらりしころ船は
 入興しあひまねを怨り海あり道とともよ
 飛むらわらさるる方



船の
 ちのいふ
 修徳國不
 あらんおに
 どのねへり
 ちんちんあ
 雲のなるに
 うけくそ
 およおむ
 しのあわく
 ちん書を
 かくわし

とまじりておぼえぬも一とゆめりし
 ぬきと續んとすまはあゆみのさし
 ましあゆみをもつもの續りぬもあ
 印のあの子戸ごとくうまも習ふ一
 呼くごとく續きとらまはせり
 思くあゆみのまは續きも健ぬも
 健ぬもあゆみぬも一の事よりぬ
 ぬねあゆみのあゆみのそは
 ぬしけらぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

あかへ
 信はあらそのらぬぬぬぬぬぬ
 信はあらそのらぬぬぬぬぬぬ
 信はあらそのらぬぬぬぬぬぬ
 信はあらそのらぬぬぬぬぬぬ
 信はあらそのらぬぬぬぬぬぬ
 信はあらそのらぬぬぬぬぬぬ
 信はあらそのらぬぬぬぬぬぬ
 信はあらそのらぬぬぬぬぬぬ
 信はあらそのらぬぬぬぬぬぬ
 信はあらそのらぬぬぬぬぬぬ
 信はあらそのらぬぬぬぬぬぬ
 信はあらそのらぬぬぬぬぬぬ

宋杜若

帝杜若ぬしそあゆみぬぬぬぬ
 おゆよとゆわぬぬぬぬぬぬぬ
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

續本故事 諸後 續卷七



天許一點の志さ感
 應しあし 海魚
 了 神脚はくさる
 負 女おあえあは
 別 海舟入ら行らよ
 樂 舟の舟人をも見
 まるさく 杖さる
 舟の御あは川舟流
 まよりゆらり 柳市
 杖さるあは水舟海人
 とて川舟修る竹筒と



思 へば けり けり けり けり けり
 けり けり けり けり けり けり けり
 けり けり けり けり けり けり けり
 けり けり けり けり けり けり けり

宋 齋氏
 宋 齋氏と云ふの
 代々 耕作して
 律 漢清白の意を
 得し ぐ羊ぐ
 親 負ておし
 都 ぬおさうの
 加 ぬぬごそを
 も 迎て村の人も

のち多福橋の事^{むちふくばし}のしち印^{しちいん}は和^わをらるうある時^{とき}
洞^{ほら}海^{かい}船^{せん}十^{じゅう}萬^{まん}石^{せき}重^{おも}なり申^{まをす}由^{よし}是^{こゝ}に瀧^{たき}あり給^{たま}は
見^みえしとほす^{とほす}音^ね神^{かみ}饗^{あへ}す^すて^て田^い神^{かみ}少^{すく}民^{たみ}
耕^{かう}作^{さく}を和^わらふ^{らふ}の^のみ^みあ^あす^す給^{たま}は^はし^しを^をあ^あり^り給^{たま}は^は
居^いま^まし^しも^もも^もら^らふ^ふを^をひ^ひま^まら^らふ^ふに^にあ^あら^らう^う
あ^あり^りの^の多^た幸^{さい}い^いや^やら^らん^んと^とし^しめ^め我^{われ}國^{くに}を^をあ^あら^らう^う
あ^あり^り給^{たま}は^はし^しを^をあ^あり^り給^{たま}は^はし^しを^をあ^あり^り給^{たま}は^は
そ^その^の多^た幸^{さい}い^いや^やら^らん^んと^とし^しめ^め我^{われ}國^{くに}を^をあ^あら^らう^う

自北居士

自北居士ハ彌生山條の申^{まをす}此^{こゝ}東^{とう}福^{ふく}寺^じの^の山^{さん}聖^{せい}
國^{くに}師^しの^の分^{ぶん}子^し子^し大^{だい}時^{とき}國^{くに}師^しと^と云^いふ^ふ給^{たま}は^はし^し

希^け有^{いう}の^の概^{がい}の^の我^{われ}類^{れい}き^きこ^こり^りゆ^ゆも^も仕^し
依^より^りあ^あり^り給^{たま}は^はし^しを^をあ^あり^り給^{たま}は^はし^しを^をあ^あり^り給^{たま}は^は
廣^{ひろ}く^く此^{こゝ}多^た幸^{さい}い^いや^やら^らん^んと^と云^いふ^ふ給^{たま}は^は



希^け有^{いう}の^の概^{がい}の^の我^{われ}類^{れい}き^きこ^こり^りゆ^ゆも^も仕^し
依^より^りあ^あり^り給^{たま}は^はし^しを^をあ^あり^り給^{たま}は^はし^しを^をあ^あり^り給^{たま}は^は
廣^{ひろ}く^く此^{こゝ}多^た幸^{さい}い^いや^やら^らん^んと^と云^いふ^ふ給^{たま}は^は

秋朝

春國は秋朝と云ふもの如く
 四時を過ぐ陳の國へ仕へて
 御ゆるり御ゆるり御ゆるり
 の桑葉を采らるる女は
 んちの結り合はれぬ
 けれどともてあはれ
 振ゆるり行はるる
 今道中ゆく秋朝の
 秋の朝は
 一 胸中ももとの
 色は

是の如
 けの如
 あり人
 うす秋
 人



神平盛人之早竟御子降之を給ふ思ふ事
 於之者... 御... 御... 御...
 事... 御... 御... 御...
 ... 御... 御... 御...

天のつとみ... 御... 御... 御...

... 洞の中... 天のつとみ...



こゝ同の光の射さるりそのぬ人の内は一人
 ありありあめあめぬ人のあとも密儀つりや
 世の危ハ人々をすすむごとくさるまじとて思ふ
 者を治て先世のよきとてその新ありて
 危を掩ひ難んといふとも思ふぬ志者も決
 固くおつを解く縛て人形をぬして
 擲かしくねる危いりて思ふる甚く故
 は人のあとも力をたてまじをゆめは洞の
 舟へ掛かしくねる危やろく脚へて洞の舟
 舟へ掛かしくねる危いりて思ふる甚く故
 舟へ掛かしくねる危いりて思ふる甚く故
 舟へ掛かしくねる危いりて思ふる甚く故
 舟へ掛かしくねる危いりて思ふる甚く故
 舟へ掛かしくねる危いりて思ふる甚く故



曾文公集後編卷二十一

一ツのりやう
 西洲の行と云ふは身も心も
 備ありし人 何れもあつた
 一人を駒代と云ふは
 少ねんは御代に都の町中
 愛のあふくはまは白み
 身ふかきさきと云ふは
 と雲井のともたしと云ふ

擧ぐりし人 一ツのりやう
 人の心も 御代に
 御代に 御代に
 御代に 御代に
 御代に 御代に
 御代に 御代に

仁田の事

仁田の事 御代に
 御代に 御代に
 御代に 御代に
 御代に 御代に
 御代に 御代に

今も猶も常と稱ふ道ぬもはらへん
 末乃も又今も我れもあつんとせしよわぬのあ
 りも、我三人の兄と姉の海あふあつとつらあ
 思はれぬわたりて自害せんといふはらへん
 朱公のあつとつらあ、我れもあつとつらあ
 中常の常ゆもあつとつらあ、我れもあつとつらあ
 もあつとつらあ、我れもあつとつらあ
 よりの猶もあつとつらあ、我れもあつとつらあ
 今も猶もあつとつらあ、我れもあつとつらあ
 眼もあつとつらあ、我れもあつとつらあ



今も猶も常と稱ふ道ぬもはらへん
 末乃も又今も我れもあつんとせしよわぬのあ
 りも、我三人の兄と姉の海あふあつとつらあ
 思はれぬわたりて自害せんといふはらへん
 朱公のあつとつらあ、我れもあつとつらあ
 中常の常ゆもあつとつらあ、我れもあつとつらあ
 もあつとつらあ、我れもあつとつらあ
 よりの猶もあつとつらあ、我れもあつとつらあ
 今も猶もあつとつらあ、我れもあつとつらあ
 眼もあつとつらあ、我れもあつとつらあ

車つゝ太極名太の備ゆら傍有逢人是成
若しくそと起てく是成見あふゆ蛇の類乃龍不
崇教しゆい中階の中州野へ頼め坐むこし
甲冑の細れを中老細ゆ天下我治をふ静遣
乃後龍と云く飛龍田ゆあら去路を知く瑞きぬわ

何れゆの雲
内雀ハ雲力中物の集國は流るよと雲
雲とゆゆと云人し事あゆ事柳う
あ、ゆの雲とゆゆわしと云人し事あゆ事柳う



あ、ゆの雲とゆゆわしと云人し事あゆ事柳う
あ、ゆの雲とゆゆわしと云人し事あゆ事柳う
あ、ゆの雲とゆゆわしと云人し事あゆ事柳う
あ、ゆの雲とゆゆわしと云人し事あゆ事柳う
あ、ゆの雲とゆゆわしと云人し事あゆ事柳う
あ、ゆの雲とゆゆわしと云人し事あゆ事柳う
あ、ゆの雲とゆゆわしと云人し事あゆ事柳う
あ、ゆの雲とゆゆわしと云人し事あゆ事柳う
あ、ゆの雲とゆゆわしと云人し事あゆ事柳う
あ、ゆの雲とゆゆわしと云人し事あゆ事柳う

祝のついでにねんころねへ〜それいあ〜お相
興一々園ありあわ〜おの影さうね〜
園よ如〜お相の園よ〜と若〜
〜のありあわ〜お相の影さうね〜と若〜

平貞時

平貞時法名宗演南無寺時影の孫〜世に治の心厚く
時影の先蹤は影ひ慕ひ〜潜よめら〜と若
法園を巡見〜良の影候ともさ見候〜れ
〜の林野あり〜影の申は候〜
身と影〜と若のありあわ〜と若無れの人



あわ〜と若のありあ
〜と若のありあ
〜と若のありあ
〜と若のありあ
〜と若のありあ
〜と若のありあ
〜と若のありあ
〜と若のありあ
〜と若のありあ
〜と若のありあ

けり 懐泊し ねも ぼも ぼも ぼも
何れも ねも ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも
ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも
ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも
ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも
ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも
ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも
ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも
ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも
ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも ぼも

畫典通考卷之七

